
妄想

しょん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妄想

【Nコード】

N2419BA

【作者名】

しよん

【あらすじ】

女子高生篠目洋子の革命。恋愛要素ないです。暗いです。でもおもしろくしたいです。続くか不明です。

休み明け

それは特にいつもと変わらない朝だった。

まだ終わらせていない冬休みの宿題の期限が今日でないことに安堵する友人に、お年玉の値段を語るクラスメイト。

冬休み明けの教室にはどこかつかれた空気が漂い、放置された教室のほこりが飛び交い、私はそれを払うように立ち上がり教室の窓を開けた。

冬の、冷たい風がはいりこんだ。

担任の教師が教室に向かってくるのを確認した後ろのドア側の男子生徒から、口々にきたつとささやき、前のドアの開く音が鳴る頃には、さつきまでの喧騒は消え失せ緊張感のある静寂の糸が張られた。

壇上に教師が上がり、淡々と今日の予定を告げ、いつもの長い話が始まる。

教師の視線にあわせるよう熱心に見つめる人、頭を垂れて教師の視線から逃れる人、別のことを考えているのか空を見つめる人、単語帳をバレないように見つめる人。

往々にして私は周りを見渡していた。

そんな中、ふとした瞬間、私に異変が訪れる。

突如催す吐き気。

厳密に言つと吐き気に近いようで異なるものだ。胃からせりあがる物であるが、咳のように勢いよく喉を痛めつけるように吐き出したい衝動にかられたのである。

それは我慢できるものではなく、
気づいたときには口を押さえて喉から異物を吐き出していた。

げえほげえほど、嘔吐するときの音と激しい咳の音が混ざったような断末魔の音である。

およそ人が、ましてやうら若い乙女がたてる音ではない。

当然のごとく集まる視線に、長い壇上の話がばつんと断絶され、演説の声色とは打って変わって私の名前を読んだ。

「篠目さん、どうしたんや!」

あ、ただの嘔吐です。

清々しく答えようとした私の考えは、ぱちくり、とひとつしたまばたきによって吹き飛ばされた。

机の上に広がる赤。

机全面ほどの量もないが、その不自然すぎる光景に思考が停止し、そのアンバランスさと奇怪さと赤の美しさに少しの興奮を覚えた。

手から伝わる違和感は視覚よりずっと遅かったが、口の中に広がる鉄の味が私を現実へと引き戻した。

慌てて立ち上がる。

ガタンと鳴った椅子の音がやたらと教室に響き、静かすぎる室内ですべての視線が私に向けられていたことに気づいた。

私を心配そうに伺う担任の教師は、さすが年相応なだけにパニックに陥ることはなく冷静に私の反応を待っていた。それでいてすぐに行動できる準備を構えていたに違いない。

口に左手をあてたまま、私は告げた。

「保健室にいつてきます。」

窓際であった私は、付き添いを求める教師の声を無視し、後ろのドアを開けトイレへと走っていったのだった。

休み明け（後書き）

厨二病をこじらせた結果先を見ずに振り回して書き続けます。

気づけばこんなことになっていた

気づけばこんなことになっていた。

周りは一面白色。

憧れの雪景色なんてとんでもない。

大阪に雪なんてここ数年降っていない。

ここは病室である。

学校の保健室からすぐさま、私が車酔いを催さないほど近くの総合病院にタクシーで搬送され、着いた途端に病室で診断された。

胃に穴が開いている。と。

痛みはないか、と問われ最近よく腹痛を催していたと答えれば、原因はストレスにあるらしい。

そして医者は駆けつけてきた父親に承諾書を書かせ私は今ベッドの上にいる。

入院することになったのだ。

学校の対応が素晴らしく見事なのだ。とんとか拍子で私は今ベッドに横たわっている。汚れた制服は持っていかれ、今頃教室の血に汚れた机もきれいに戻っているに違いない。

あまりに勝手に物事が運ぶと脳がついていかなくなる。非日常であ

る今日をどう処理すればいいのか。

私は眠ることと解決を図った。

気づけばこんなことになっていた（後書き）

医学的知識なんて何もないから適当に切り抜けるそれが厨二クオリティ。申し訳ない。次話はよくない表現入ります気持ち悪いです。EROではないですが苦手な方は飛ばしてください。

タオル

机に広がった血。

これはクラスメイトが口から吐き出したものだ。
すなわちクラスメイトの体内をめぐっていた血である。

永遠に循環されると思い違っていたこの血液は、ある事件によって
血管が破裂し外に吐き出されたのだ。
どのようなだろう。

ぬるぬると見たこともない彼女の血管の中を走り続け、様々な器官
をわたり見てきた血液が、今本来ではあり得ないところに横たわっ
ている。

しかし血液はまたこの環境にのうのうと対応していく、酸化され茶
色くなり、血液中の水分が蒸発されていくのを、ただ見ているのだ。

僕は狂おしい気分を駆られた。

本来彼女のものであった血が、彼女によって生成された血が、まる
でもう他人のごとく突き放されているのだ。

例えるなら大事なぬいぐるみを高台から海に落としてしまい、それ
がかろうじて突き出た岩に落ちたのを見たかのごとく。

そんな思いを張り巡らせながら、僕はその血が彼女の椅子の上のタ
オルに落ち染み込んでいくのを見た。

机から垂れる滴が僕を嘲笑う。

僕はまたすこしの悔しさを覚え、同時にある考えを浮かばせた。

タオルを持ち赤く染まった部分をなめる。

唾液によって溶け出す液体を飲み込むと言いかれぬ満足感と興奮が
身体中を血液と共に巡り回った。

今まで見てきた何よりも興奮を覚え、同時に何かを埋められる満足
感を得る。

きっと僕は彼女を愛しているのだ。

僕はタオルにキスを落とした。

タオル（後書き）

なんだこれ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2419ba/>

妄想

2012年1月6日02時48分発行